

小学校書写学習の毛筆導入授業における 学習指導法に関する実践報告

齋木久美*・小瀧綾子**

(2010年9月15日受理)

A Practice Report about the Effective Learning Method of the Introduction Class
of the Calligraphy of the Elementary School

Kumi SAIKI and Ayako KOTAKI

キーワード: 小学校書写, 毛筆, 導入授業

毛筆で整えて書くためには、適切な用具を用い、姿勢や筆順の確認をおろそかにせず、点画の長さや方向、接し方などに注意しなければならない。初めて毛筆を用いる学習では用具の使い方の理解と習熟が大切である。しかし毛筆の用具は日頃の硬筆の用具とは異なるので、児童は、一つ一つの用具について名前と用途を確認することが必要になる。さらに墨液をつけて書くという毛筆の使い方学ばなければならない。そのため毛筆を導入する授業が学習者にとっても指導者にとっても煩雑なものになってしまい、その後の毛筆を使用する学習に影響を生じている。

そこで本稿では毛筆を初めて用いる授業の配慮点や工夫点を検討し、先行事例の効果的な学習指導法を組合わせて実践により検証した。その際、ペットボトルを用いて筆を洗う、ワークシートを用いて筆の動かし方を学習する、に成果があった。

はじめに

小学校国語科書写では毛筆は硬筆の基礎を養うものとされ、第3学年からその学習が始まる¹⁾。毛筆では点画に注意して書く²⁾ことが指導事項であり、そのねらいは毛筆を使用する文字学習では大きく書くことで硬筆の学習では気づきにくい部分に気付かせ、その書き方を確かめさせることである。このことが文字を整えて書くための大事なことを児童に学ばせるという効果につながる。

原³⁾は、大きく書くことによる成果はマジックインキなどによっても指導は可能であるが、「始筆終筆など文字のつくりに対する理解を持たせなくてはならない」ことから手の運動も含めて、毛筆を用いて大きく書くことは大事であると述べている。上篠⁴⁾は毛筆は、「柔らかいから油断ができ」

*茨城大学教育学部書写書道教育研究室

**神栖市立植松小学校

ず、一種の緊張を伴うと指摘する。毛筆には「点画の一つ一つの構造というものをはっきり認識させる」、点画の接し方、交わり方、方向などの「点画の組み合わせがはっきり分かる」、「全体の字形がよくわかる」といった特徴がありその特徴を「硬筆よりもはるかに毛筆のほうが正確に伝えることができる」ので、このことが、「一画一画に神経を集中させ書くこと」につながり、さらに「字をていねいに書く態度」の育成になると述べている。したがって毛筆による学習は文字の一つ一つの点画の理解をうながし、整えて書くための態度と技能を育成するというねらいがある。

毛筆を初めて導入する授業の内容について、藤原・細谷⁵⁾は「(1)用具の使い方を適切に指導する」「(2)姿勢・執筆などの技能を順次高める」「(3)適切な筆の使い方を指導する」の3点を上げている。毛筆は日頃児童が書字で使用する用具とは全く異なるものであるから、まずそれぞれの用具の使い方への指導が必要である。そして適切な筆の使い方を理解し、実践によって確かめるという授業の流れになる。

2 毛筆を初めて導入する授業で配慮したいこと

前項で述べたように、毛筆には硬筆にはない長所があるが、用具の扱いが難しいこと、毛筆で思い通りに書き表すためには練習が必要であることなどの短所がある。用具についてはまず毛筆の用具の準備と片付けから学ばなければならない。児童が普段使用している硬筆の用具とは全く異なるので、毛筆の用具の名称と用途を学習する必要がある。初めて触れる用具であるから、時間をかけて丁寧に名称等の学習を行いたいところであるが、毛筆で書く時間も必要であるから、効率よくすすめる必要がある。

次に検討したいのが、筆の使い方の指導である。児童が初めて持つ筆の適切な使い方を学習するためには、どのように筆を持つのか、どのように点画を書くのか、といったことを理解させ、筆の動かし方を学習させる必要がある。その後筆の使い方を理解し確かめる体験を積み重ねることで、今度は教材を見たときに書き始めの筆の位置や文字を構成するそれぞれの点画の太さ、長さや方向などを実際の筆の動きとして推察できるようになり、その推察をもとに文字を書き表せるようになる。このくり返しによって、文字の整え方を身につけていくのである。ところが筆の使い方がよくわからないままの毛筆の学習では常に筆をどのように使うのか、ということばかり気にすることになり、文字を整えて書くためにどうすればよいのか、ということに集中できないことになる。

そこで以下の項で、用具の扱いと筆の使い方の指導法について、それぞれの配慮点とその対応方法を述べた後に、実践による成果を報告する。

3 毛筆用具の扱いの指導で配慮したいこと

教員養成過程で学ぶ大学生の小学校での毛筆学習に関する感想には、用具の扱いの指導が十分でなかったために授業に集中できなかったというものがあり、次（一部修正）に示す。

とっつきにくい毛筆

先生が変わっていくうちに、毛筆は私にとって良くわからない、とっつきづらいものにな

ってしまった。なぜかという、用具の扱い方など全てにおいて先生によって言う事がばらばらだったのだ。最初の先生は「良い字を書くには筆は穂先だけ、全体の3分の2くらいをおろす」と言ったが、次の先生は「全部おろさなければ字なんか書けない」と言った。

また使い終わった筆についてある先生は「毛がいたむから水では決して洗うな」と言ったが、別の先生は「固まってしまっは使いものにならなくなるから必ず良く水洗いしろ」と言った。まったく逆のことを平気で言われ、私たちは結局、そのときどきの先生にあわせるしかないの、そうやっているうちに何が正しいのかさっぱりわからなくなってしまった。同時に、書写は要領を得ない不思議な授業になってしまった。そうやって方法に常に疑問を持っていたので「字を書く」という本来の目的より道具や紙に対する扱いのほうが気になってしまっ、なかなか身を入れて取りくむことができなかつた。

この「とっつきにくい毛筆」では、用具の扱いが担当者によって異なることから生じた学習者の混乱の様子が綴られている。「要領を得ない不思議な授業」になってしま、本来の目的である文字を書くことに集中できなかつたという。これでは毛筆学習がねらいとする文字を整えて書くための基礎基本の習得どころではなく、むしろ逆行してしまう状況になっていたことになる。各学校内の対応の違いにより、書写の授業は担任以外の先生が担当するという場合もあり、「とっつきにくい毛筆」を書いた学生の小学校は指導者間の連携が十分になされていなかつた例といえる。

大学生の感想の中には、高校で選択した芸術科書道で初めて毛筆の用具の扱いを学んだ、と記述したものもあつた。こういった感想から気付かされるのは、学習者が毛筆で半紙に文字を書いていることを毛筆の扱い方を理解していることととらえてしま、指導者が適切な対応をしないまま毛筆学習が進められている状況があるということである。

4 毛筆用具の扱い方の効果的な指導について

限られた時間の中で児童に初めて使用する毛筆の扱い方を理解させ、その後の毛筆学習への意欲を高めるために、どのような配慮が必要であろうか。

藤原・細矢⁶⁾は毛筆学習の導入時の児童の様子を次のように述べている。

新しい用具をそろえて白い紙に、毛筆で文字を書くことに非常な興味と関心を示すが、その経験は、大部分の児童にとって初めてのものである。ただ一部の児童が書道塾で経験したり、家庭での経験があるだけである。

初めて使う用具に興味関心を示し、意欲的に取り組もうとする学習者の興味関心を持続しつつ、用具の扱いを学習させるためには工夫が必要である。図1・2は現在使用されている小学校3年生書写教科書の光村図書⁷⁾と東京書籍⁸⁾の毛筆の扱いに関するページの一部である。先行実践例や現行の教科書等をもとに配慮点を以下にまとめる。

4-1 全体の用具の準備といくつかの用具について

①用具を机に出す順も指示をする

初めて使用する用具であるからその名称を示しながら、準備の方法を学習させることが望ましい。

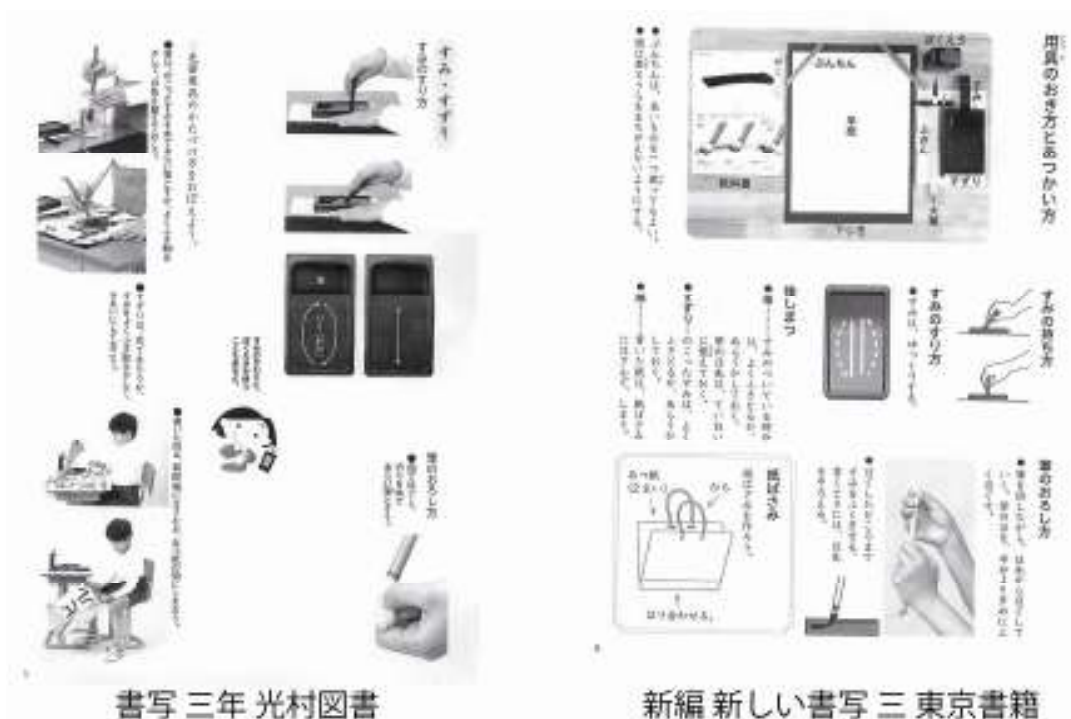


図 1

図 2

児童は各用具の用途などに興味を示すことが多いが、細かく説明したり用途について考えさせたりしている時間を作るのは難しいので、初回は簡単に話す程度にする。図2の上部にある用具配置図を示すなどして、用具を出す指示をする。このとき児童が自分の教科書を広げてしまうと用具の準備がやりにくくなるので、図を黒板に掲示し、それを確認しながら準備させるようにするとよい。そして指導者の指示に合わせて順に、「1新聞紙、2下敷き、3文鎮、4硯（または毛筆セットの硯箱ごと）、5大筆、6墨（墨液）」を机に出して配置させるようにする。毛筆用バッグなど使わないものはいすの下に置くなどの指示もしたい。

墨液の容器は硯の奥に置かせるが、墨液を硯に入れる指示はできるだけ書く直前がよい。毛筆セットに固形墨が用意されている場合、児童は何に使うのか興味関心を示すが、初回の授業時に固形墨についてまで触れるのは難しい。名称と使用方法を簡単に述べ初回は使わないという指示も必要である。小筆についても同様である。

②硯の名称「海・りく」を教える

硯の名称に関しては、用意する墨液の量や筆の穂先をそろえるなどの指示をするためにも、硯の各部の名称（海、りく・おか）を教える。

墨液を硯に入れることについては1. 墨液のふたをはずす、2. 用意する墨液の量を示し、硯のうみに入れる、3. 墨液のふたをしめ、所定の位置に置く、という指示をすることになる。児童に

とっては初めて使用する用具ばかりである。注意が散漫になってしまうことがあるので、墨液のふたをしめるといった指示も大切である。墨液のふたをつまんでまわすタイプのものの場合、こういった動作に慣れていない児童の中には、「うまくあげられない」ということがあるので、指導者がふたをゆるめてあげるなどの対応をする。使用後の硯は反古紙を用いてふきとるようにする。

4-2 用具の片付けの指示について

①大筆を洗うためにペットボトルを活用する

授業前に準備しておきたいのが8分目程度の水を入れた500mlのペットボトルである。学習が始まる前に水を入れてしっかりふたを閉め、机のわきに置くよう指示をする。

使用した大筆の片付けは、持ち帰らせて各家庭で洗う、学校内で洗うといった方法がある。前者は筆を洗う片付けの時間を省略できるが、持ち帰った当日に洗うようにしないと毛に残った墨液が固まり洗うのに手間がかかる。また洗わずに次回持参することになった場合、この状態の筆では十分な学習ができないといった状況になる。用具の片付けも学習の一部にとらえ、授業内で筆を洗うようにしたい。しかし限られた時間に学校内の水道設備で洗うのは難しい。そこで、「ジャムの空き瓶などを利用しよう」といった方法が紹介されており、先の光村図書の教科書に示されているのがこの例である。最近では手頃であることからペットボトルが活用されている。

余分な墨を反古などで拭き取り、8分目程度の水を入れた500mlペットボトルで筆を根本までつけ6~10回程度上下させながら洗い、穂先を整えてから筆巻きなどに片付けるとよい。授業終了後ペットボトルの水を各自が流して捨てるようにすれば、筆の片付けまで座ったままでできる。

②筆洗い用のペットボトルを用いる注意点と保管について

汚れた水の入ったペットボトルをふると墨の泡が生じるが、攪拌すると墨の粒子がペットボトルの内側に拡散しかえって汚れてしまう。そうするとペットボトルをすすぐ手間が生じる。ペットボトルで遊ぶことがないようにきちんと指示するようにしたい。またペットボトルを使用しないときはしっかりふたをしめて机の下などに置いておくなども徹底するようにしたい。汚れた水を捨てるのに時間を要する場合があるが、回を重ねるごとに児童は手際がよくなってくる。

なおペットボトルの保管は、上部を切り取った牛乳パックを数列貼り合わせた収納ケースを教室に設置すると便利である。記名し指定の場所に収納させるとよい。

4-3 大筆の使い方とその関連事項について

①大筆を使う時の指示を明確にして徹底させる

指示を明確にするといったことは毛筆を使う場合に限ったことではないが、初めて使う用具が多いので、説明を聞くときは大筆を置くなどの指示を徹底させるようにする。

②毛をほぐす

毛をのりで固めたものとさばいたものの2タイプの形式で市販されている。児童向けのものはのりで固めたタイプのものが多い。墨液を吸い上げやすい状態にするために使用する前に毛をほぐすよう指示、全員の筆の毛がさばかれている状態になっているか確認する。

③大筆を持つ位置と持ち方

大筆を持つ位置は軸の下から三分の一あたりになるが、児童には「軸の真ん中より、少し下を持ちましょう。」などと説明する方がわかりやすい。筆の持ち方は一般に、人差し指だけを軸にかける場合（単鈎法）と人差し指と中指の二本の指を軸にかける場合（双鈎法）の二通りがある。児童が安定して大筆を持つには、指を二本かける持ち方を進めるとよいようである。

④大筆の持ち方の指導と墨液の準備とどちらが先か

毛筆の毛をほぐし、持つ位置を確認したら、いよいよ筆に墨液をつけることになる。ここで事前に検討していきたいのが、墨液をいつ硯に入れるかということである。児童が用具の扱いに慣れてくれば、あまり気にしなくてもよいことだが、初めての場合は全体に指示して一緒に進める方が効率もよく、児童も筆を使うという目標に集中できる。墨液に不用意に触れて汚れてしまったという状況をできるだけ回避するためには硯に墨液を入れてから筆に墨液をつけるまでの時間ができるだけ短い方がよい。このことから墨液を入れたらすぐ使うという次の順序がよいようである。

1 用具の準備→2 用紙の用意→3 文鎮を置く

→4 筆をさばく→5 持ち方の確認→6 墨液を入れる

→7 墨液をつけ穂先をそろえる→8 大筆で書く

この準備の順では筆の持ち方を確認したあと、いったん筆を置くことになるが、この時に使わないときの筆を置く場所を指示し、そこに置かせるようにするとよい。筆を持たない（使わない）ときの置き場所を決めておくと、その後の活動も比較的スムーズに進められるようである。

⑤墨液をつけ、穂先をそろえる

墨液を含ませ穂先をそろえた状態の大筆を見せた後、墨液が入った硯の「うみ」に大筆を入れて墨につけ、たっぷりしみこませてから、硯の「りく」で余分な墨液をおとすようにしながら穂先をそろえるよう児童に指導する。なお「りく」の上で筆をまっすぐに立てた時に、墨液がぽたぽたと垂れて落ちる状態では墨を含みすぎており、児童にとっては扱いが難しい。「筆を立てた時に落ちないように余分な墨液を硯のりくで落としましょう。」といった指示をするとよい。

⑥大筆を置くときの向きと位置を決める

机上の半紙や手などを墨液で汚してしまった児童を観察していると、大筆に含まれた墨液が多いままねかせて軸部分に墨液が流れて汚れてしまう、大筆を置くときの向きや位置を決めていないためにうっかり墨液のついた部分をさわってしまうといった様子が見えてくる。このことから大筆を置く場所を指定することは大切である。藤原・細谷⁹⁾は「筆のすみが机などにつかないようにする筆の台があると便利である。」として身近なものを利用することを進めている。最近の市販の書写セットには筆をおく部品がついているものもあるのでそれを活用するとよい。こういったものがないときはぞうきんなどにせんたくばさみを立つように止めて大筆を置く場所にするとうい。

⑦大筆の後片付け

4-2のペットボトルを活用する、の項でも述べたが、使用後は不要な半紙等で余分な墨液をとってからペットボトルの水で洗い、穂先の形を整え筆巻きなどに入れて後片付けをする。毛をのりで固めた筆には透明のキャップがついていることがある。児童は鉛筆の扱いの感覚で使用後の大筆にキャップをつけようすることがある。乾きにくくなったり毛の部分を痛めたりするのでキャップはしない方がよいのでその指示もする。実際にキャップをしたまま放置しておくとかびが繁殖することがある。

4-4 半紙ばさみを活用して学習の効率化をはかる

使用した半紙を一時保管するにはやはり古新聞を利用すると都合がよい。よほど墨液がついた状態でなければ、はさんで置くとほどよく乾く。床に新聞紙を広げて使用した半紙を置く方法は指導者の机間指導に支障をきたすだけでなく、児童にとっても適切な方法とは言えない。すでに新聞紙の上に置いた半紙の上に次の半紙を重ねて置かないようにするために、児童はいすから立ち、床の新聞紙を1枚めくってから直前に書いた半紙を入れてから座る、といった動作が必要になるからである。そこで教科書に示されたように、事前に半紙ばさみを作りそれを用いるとよい。「新編新しい書写三」⁸⁾には厚紙とひもを用いた紙ばさみの作り方が、「書写三年」⁷⁾には書いた紙をはさむ様子が掲載されている。新聞紙を半分に切りそれを綴じたものを用意するだけでもよいが、教科書の例のようにひもがあると机のよこにかけることができる。高学年では自分で作ることができるが3年生の場合は保護者に依頼して家庭で準備してもらうこととなる。そこで本稿では紙袋の持ち手を利用して手軽に作成する半紙ばさみの作り方を15ページに掲載した。厚紙を用いていないので多少耐久性は劣るが、家庭にあるもので手軽に作成できるようになっている。是非活用してほしい。実際に小学校3年生の家庭で用意してもらったものについては後述するが、紙袋に絵を書くなど工夫したものを作ることができ、好評であった。

5 毛筆の筆使いを指導する上で配慮したいことについて

前項では毛筆の用具の扱い方について述べたが、次に毛筆の筆使いを指導する際の配慮点について考えてみたい。次に示したのは、筆の使い方がわからなかったという大学生の感想である。

大嫌いな毛筆

毛筆の授業が嫌いだった。この毛筆嫌いは小学校の書写学習から。何が嫌かというとならず、筆をどう動かすかがわからなかった。また小二までは硬筆で、まだうまく書けていたのに、思うように書けず悩んだ。書いたものを教室に貼られるのも、先生が朱墨で花丸をつけていくのも嫌だった。私の字にはめったに花丸がつくことはなかった。形を整えようと二度書きをすると怒られた。せっかくならうまく見せたい、と思った末の二度書きだったのに、とますます嫌いになった。中・高では毛筆の授業がなかったので本当にうれしかった。

「大嫌いな毛筆」は筆の扱いの学習が十分に行われなかった事例である。まず筆の動かし方がわからなかった、と述べている。そしてわからないなりに形を整えようと二度書きして、そのことに注意を受けてますますきらいになったと記述している。筆をどのように使うか理解する、その後その使い方に習熟する、といった学習過程の機会がなかったというものである。しかもわからないなりにやってみた二度書きを注意され、余計に毛筆学習が嫌いになってしまったわけである。確かに二度書きはよいとは言えないが、二度書きしてしまった部分について、少なくとも学習者はその部分の筆使いなどが整っていないことに気付いていることになる。その改善のために二度書きを行ったと受け止めるならば、なぜ二度書きしたのかについて問い、学習者が改善すべき点に気付いていたことを評価するような言葉かけをしてもよいのかもしれない。こういった指導者の対応では、次回以降の毛筆学習に意欲的に取り組ませることにつながってくるはずである。

6 毛筆の筆使いの指導を効果的に進めるために

6-1 初めて筆を使う時に何を書かせるか

藤原・細矢²⁾は毛筆を初めて使用する時間の指導について「細かい注意を与え」過ぎて児童の「書いてみたいと思った意欲を失わ」せる場合もあると述べている。「始筆こそ、毛筆を使って書く最初」だから初めての授業では「始筆」の練習に絞るべきで、「毛筆の扱いになれてから基本点画の学習を進めてもよい」としている。

原³⁾も藤原らと同様の指摘をし、そのためにも「形を作らせない」ことがよいと述べている。そしてはじめから文字を書かせた場合の児童の不慣れな様子を次のように説明している。

持ちなれない筆を持って文字を書くとき、子どもは、形を作ろうとして懸命になる。腕の動きによって文字を書くのであるから、ともするとはみ出したりちぢかんでしまったりする。バランスをとって書き上げることが困難な子どもが多いのが実情である。それに対して、手本と同じような整った形をとらせようとする、死んだ線を書くようになってしまう。不器用な子どもは、特にこの傾向が強く、二度書きなどしてなぞったりする。また、途中で筆をとめてしまったり、書きながらきよろきよろ見回したりする。これは、形に対して自信がないからであろう。

最初は思い切り大きく、一気に書かせよう。はみ出してもいいのだという安心感を与えて書かせよう。この、一気に書くということがとても大事だと思う。一気に書くということが、筆勢につながってくるからである。

毛筆のねらいが文字を整えて書くことの基礎基本を習得させることであるからといって、筆の動かし方がよくわからない時に文字を書かせることは、成果がえられないだけでなく逆効果になるということである。文字を書かせることは「形をつくる」という活動を強いることになり、初めて筆を持つ児童の課題としては適切とは言えず、課題を始筆の筆使いに絞るなどの配慮が必要である。

6-2 毛筆は腕で書く

毛筆を初めて使用する授業ではいきなり文字を書かせるのではないとしたら、何を書かせどのように進めればよいだろうか。

神谷⁹⁾は初めて毛筆を導入するでは、「大筆を立てて」書くためにも、まるや渦巻きを書く学習がよいと述べている。そして毛筆の筆使いで大事な「穂先の方向、終筆の仕方のイメージをつかませる」ためには「腕書き」がよく、「腕書き」を徹底することが大事であると述べている。

阿部¹⁰⁾は初めての授業では筆の「感触を味わう」ことが大切であると指摘する。そして「太筆に墨をつけて書くというのはどんなものか、その感触を味わわせ、筆に対する親しみも持たせたい。」として、最初の時間では用具の準備、筆の持ち方の指導のあとに「筆の動かし方—懸腕法で立てて運筆する—」「筆になれさせ方—いろんな線を書かせてみる—」を上げている。そして神谷と同様に毛筆では腕を大きく使う「ひじで書くつもり」がよいと指導している。毛筆を初めて導入する学習では、腕を使って書くこと、まるや渦巻きの線の練習がよいということになる。

6-3 大筆による筆使いの指導とその関連事項について

先行事例をもとに以下に大筆を用いる際の留意点をまとめる

6-3-1 筆の軸も自分の背筋（せすじ）もまっすぐにして、腕で書く

筆の機能を生かし、線を書いたり文字を書いたりするためには、筆の軸は立てて使う必要がある。大筆を立てるためには、手首を伸ばしてひじを軽くあげ（脇の下につけないで）肩の力を抜き、腕が自由に動くことが大切である。そのためにも背筋をきちんと伸ばしたよい姿勢を保つ必要がある。よい姿勢を保つには、硬筆で書字する時と同様に足のうらを床につけ、腰を伸ばすような座り方が大事であるので、関連させて指導したい。上体が前屈みになっている状態では大筆の軸がまっすぐにならず、大筆を大きく動かす「腕で書く」ということがむずかしくなる。また児童によくありがちなのは、「腕で書く」が実感できないまま、手首を内側に曲げたり伸ばしたりする筆の動かし方をしてしまうことである。このような手首の使い方になっている場合は、姿勢や大筆の持ち方とも関連している場合が多いので、合わせて点検したい。またよい姿勢で安定して書くために、筆を持たないほうの手や腕に対する指示も必要である。軽くひじを張り手のひらで半紙を押さえるよう指導する。

なおよい姿勢を保つには、硬筆で書字する時と同様に足のうらを床につけ、腰を伸ばすような座り方が大事であるので、関連させて指導したい。

6-3-2 ワークシートで学習の精選と効率化を目指す

①ワークシートを活用するという考え方

用具の準備や片付けに時間がかかるからといって、半紙1枚しか毛筆で書かなかったということでは、意欲や関心を持たせづらい。半紙サイズの水書シートを活用する方法もあるが、費用の点から現実的ではない。

そこで使用した半紙を片付けて新しい半紙を用意する一連の動作にかかる時間を省くために、ワークシートをホチキスで綴じたものを配布する方法を検討した。印刷してワークシートを綴じる手間はかかるが、2時間目以降は半紙を用いるので、ワークシートを用意する手間は初回のみである。

②ワークシートの内容

線書き、始筆の練習を経て、横画の練習まで効率よく進めるために次の内容のワークシートを検

討した。

a 渦巻きを書く

書き始めの位置と大きさがわかるようにうずまきの書き出しを示す。

よい姿勢を意識し大筆の軸を立てて渦巻きを書く練習である。見本を見せ、「一度墨液をつけたら、かすれてもよいので、できるだけ長くうずまきを書こう」として指示をする。

うずまきを書くには腕を大きく動かす必要があるので、「腕書き」を実感させることもできる。

b ジグザグを書く練習。

aと同様に大筆の軸をまっすぐに立てて書く。ジグザグを書かせるものである。始筆の角度に気付かせるよう配慮する。

c 始筆の角度に気を付けて横画を書く。

始筆の角度に気を付け、長さや太さを変えて横画を書く練習をする。始筆の45度を意識させると、鉛筆を持つ時のように筆の軸を寝かせて書こうとする児童もいるので、腕で書くことを意識させながら、練習させる。

毛筆用ワークシートとしてaからcのプリントを綴じたものを配布する。書く時にはワークシートの下に毛筆用下敷きを入れる。1枚書き上げたら、それをめくり下敷きを入れ替える。半紙を用いる場合に比べこの動作はさほど負担になることもなく学習を進めることができる。

7 授業実践をもとにした結果および考察

以上で述べてきた毛筆導入授業の方法を実践した記録を紹介する。小学校3年生の毛筆導入授業で「用具の準備、筆を持って書く、用具の片付け」の流れで2時間扱いの授業実践をして検証した。

①準備と片付けについて

個人差があるものの、準備から後片づけまで行うことができていた。なお、児童たちが準備・後片付けに戸惑っていたものは、準備の段階では、硯が入ったケースを置く向き、墨液を入れる量などであり、後片付けでは筆の穂先を整えてしまうこと、ペットボトルで筆を洗うことであった。しかし2時間目では要領よく進めることができていた。

②筆で書くことについて

初めて毛筆に触れる児童は、1つ1つの動作に対し、「これでいいのかな。」と、教師の確認を仰いでいた。墨液の量を指示しても、「(すずりに) どのくらい墨を入れるの?このくらい?」と確認する声があり、書いてみましょう、との指示に対しても、「書いてもいいの?」という児童の声がちこちで聞こえた。とにかく慎重になっている様子が見えしたが、無理のない進め方であったので、スムーズに進めることができた。

③半紙ばさみについて

作り方のプリントを配布し、3年生の各家庭で作ってもらうよう依頼した。児童の好きな絵が印

刷された紙袋を用いたり、紙袋部分に絵を画いたりするなどの工夫がみられた。保護者の協力のもとに用具の準備も意欲や関心をもって進めてくれていたことがわかった。

④ ペットボトルの使用と片付けについて

授業の前に用意させた。何に使うか不思議そうにしていたが、最後に片付けで使うので足下に置くように指示したところ、混乱はみられなかった。筆を洗う際には実際にやってみせた時に、ペットボトルの水がだんだん黒くなっていくのおもしろがる様子も見受けられた。全員の片付けを確認したあとで、号令をかけて授業終了の指示をした。その後流しで捨てるように誘導したが、1度に2～3人ずつしか水を捨てることができないので、予想より時間がかかってしまった。

なお授業実践の前の検討でワークシートを用いると後片付けに使用する反古紙がないので、表紙に半紙を一枚綴じ込むことにした。片付けではこの半紙をはがしとって下敷きの上に置き、線を書きながら大筆に残った余分な墨液をとるようにさせた。その後この半紙を折りたたみ、洗った筆の水気を切る、硯をふくなどに利用することを実演しながら説明したところ、初めての活動にしては滞りなく進めることができた。硯を拭くなどに使用した半紙を捨てるために立ち上がろうとする児童がでてくると混乱してしまうので、指導者がゴミ袋を持って捨てる半紙を回収するようにすると、混乱もなく児童は毛筆セットへの片付けに専念できることがわかった。

⑤ ワークシートを活用したことについて

ジグザクや始筆を意識して横画を書くワークシートは教科書⁸⁾のマークや副教材活用して作成したものをを用いた(14ページ参照)が、書写の教科書には基本点画についてのページが掲載されているので、この部分をトレースするなどして手軽に作成できるので試してほしい。

実際に筆をもって書く前は不安げな様子を示す児童もいたが、書き始めると楽しそうであった。はじめて筆を持って書いたのが渦巻きであったが、できるだけ長く幾重もの渦巻きを書くには筆をまっすぐにして腕を大きく動かす必要があるため、ほとんどの児童が筆をまっすぐにし背筋を伸ばした状態で書いていた。筆で書く時の姿勢や持ち方を実感させるには、渦巻きの練習は効果的であるため、毛筆を使用する学習の始めに書くもの(筆ならし)として位置付けるとよい。

「始筆」の筆をおく角度(45度)については、「折り紙を半分に折った時」などのような言葉を用いて伝えるようにするとわかりやすいようである。

書き終わったシートをめくって机の奥にたらすようにし、次に取り組むシートの下に下敷きを入れる、という動作に少しとまどう児童もいたが、慣れてくると手早くできるようになっていた。ワークシートをめくると用紙を立てる状態になるため、乾く前の墨液が流れてしまうという様子も見られた。初めて用意した毛筆で初めて書くという活動であるため、児童は1つ1つの動作に慎重になっているので、予想していたよりも時間がかかってしまうことがわかった。最後には「もっと書きたい。」「(残念そうに)もう終わり。」と話す児童の声もあったが、限られた時間内に大筆で線を書く、始筆の練習をするということが効率よく進められた。

⑥ 2時間目の全体の様子

翌週の2時間目は前回よりも作業が早く、墨汁を入れる直前までの準備はよくできていた。後片

付けも、前回のことを思い出しながらできていた。教師に確認してから活動するということが減った様子うかがえた。

なお筆のほぐし方が十分でないため書いた線が細くなってしまったり、思わず二度書きにより書き足してしまったりする児童も見られたので、個別に対応するようにした。しかし、「書写って思っていたよりも、楽しかった。」などと話す児童もおり、授業によって毛筆への興味が増していることが確認できた。

14 ページの図7は、児童が始筆に注意して書いた「上」の例である。まとめの学習として、かご字で縦画を示しそこと横画を書き出す位置のみを示して、長さや太さを考えて横画を書くようにさせたものである。全員が「上」の2画目と3画目の長さを変えて書けていた。また「上」の3画目の横画の始筆の角度について約半数の児童がほぼ45度で書けていた。始筆の角度が45度ではない書き方になっている児童の中には、筆を倒しすぎてしまっている場合が見受けられた。定着するまでは継続して指導していく必要であり、姿勢や持ち方と関連させて指導するようにしたい。

⑦ 紙ばさみを利用した2時間目について

③でも触れたが、作成方法のプリントを配布し紙ばさみの準備を各家庭に依頼した。好みの紙袋を利用して作成するなど、準備の段階から興味関心を持って取り組んだ様子うかがえた。この紙ばさみは2時間目に活用したが、机の脇にかけ、書き終わった半紙を楽に挟むことができていた。

1時間目の指導により、ほどよい墨量で書けているので、使い終わったあとの半紙を片付けて次の半紙を用意するという一連の動作が効率よく進められた。学習の成果の確認として紙ばさみごと回収することも可能であるので、便利であった。

おわりに

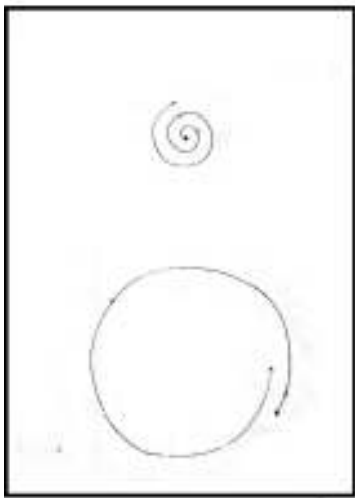
毛筆を使用する学習では、筆順や姿勢などの文字を整えて書くための要件を効果的に学習することができるが、そのためにも毛筆の特徴を知り使い方を理解して習熟することが必要になる。小学校第3学年から毛筆の学習が始まるが、毛筆を初めて導入する授業では、毛筆の用具の名称や用途に関することと毛筆を使って書くことの二つの内容の学習をすることが求められるが、煩雑になってしまい、学習者が毛筆の学習に意欲的に取り組めないという状況になっていた。このことがその後の毛筆学習全体に影響を与えてしまうことになり、毛筆を初めて導入する授業を充実させることが必要であった。この問題を解決するために毛筆用具の準備、片付けの指導と毛筆の使い方の指導の2つの内容を精選し成果のあった、毛筆の後片付けではペットボトルを用いるようにする、半紙を使用せずワークシートを用いる、の2点を中心に報告した。今後はさらに効果的な方法について検証していきたい。

謝辞 実践に協力して下さった、茨城大学教育学部附属小学校、水戸市立常磐小学校の関連の方々に謝意を表します。

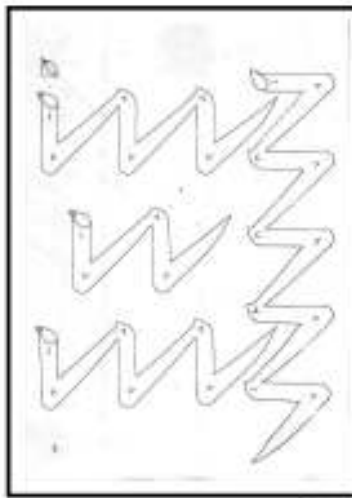
注

- 1)平成10年版小学校学習指導要領国語の[言語事項]に「毛筆を使用する書写の指導は、第3学年以上の各学年で行い」とあり、平成20年版では[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]に「毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行うこと」と示されている。
- 2)平成10年告示の小学校学習指導要領国語の[言語事項]のア「書写に関する事項」の第3学年及び第4学年に「(ウ) 毛筆を使用して、点画の筆使いや文字の組立て方に注意しながら、文字の形を整えて書くこと。」とある。同平成20年告示では[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]の第3学年及び第4学年に「ウ 点画の種類を理解するとともに、毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと。」となっている。
- 3)原文「入門期の毛筆書写を楽しく学習させる工夫―正しく書くために筆勢意識を持たせる指導―」『国語科教育 書写指導』第5集(明治図書,1973) p. 66,p. 67.
- 4)上篠信山著『訂 現代の書教育』(木耳社,昭和38) p. 173~175.
- 5)藤原宏 細矢肇 著『国語科 書写指導講座 第4巻 毛筆指導』(明治書院、昭和43) p. 4~7, p.8, p. 22.
- 7)『書写3年』(光村図書,平成17) p. 5.
- 8)『新編 新しい書写 三』(東京書籍,平成17) p. 5.
- 9)神谷裕子『TOS S子ども攻略ポイントシリーズ 5 書写の授業：書写の授業これだけ知っているとこわくない攻略ポイント20+@』(明治図書,2003) p. 25~30.
- 10)阿部惣一「入門期の指導(3年生,最初の二,三時間)」『授業づくりブックレット3毛筆書写ワ
ンポイント・アドバイス』(明治図書,1990) p. 24~31.

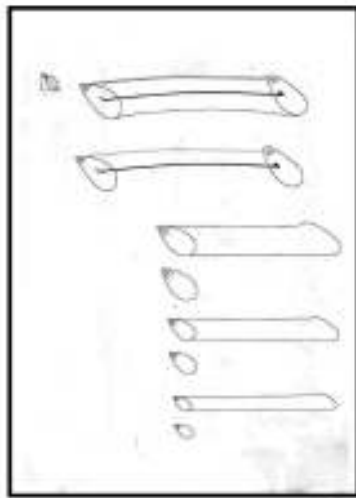
ワークシートの例



1



2



3



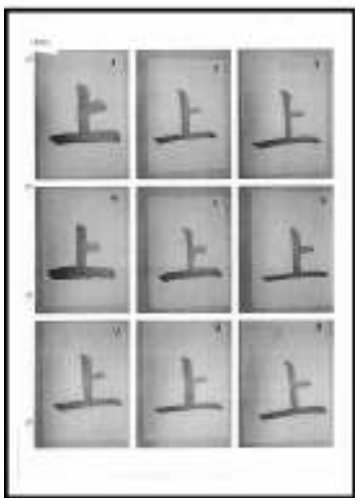
4



5

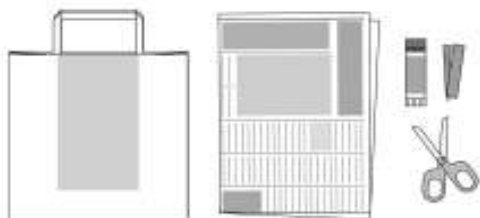


6

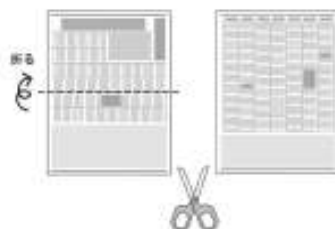


7

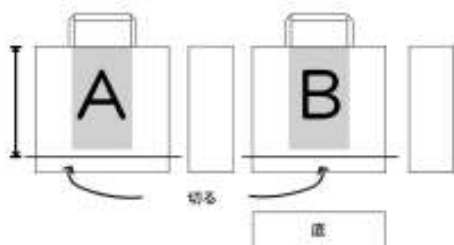
紙ばさみの作り方



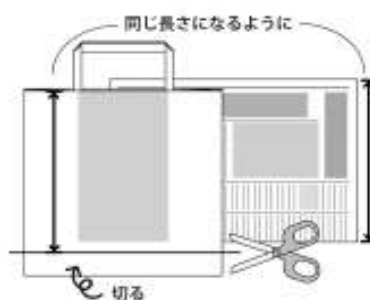
- 1** 用意する物：紙袋 新聞紙（朝刊1日分）、ノリ、ホチキス、はさみ



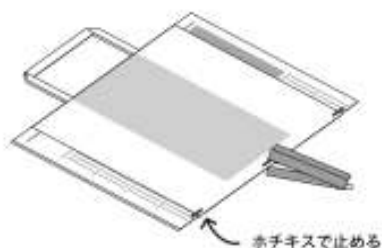
- 2** 用意した新聞紙をすべて半分に切り、それぞれを半分に折る



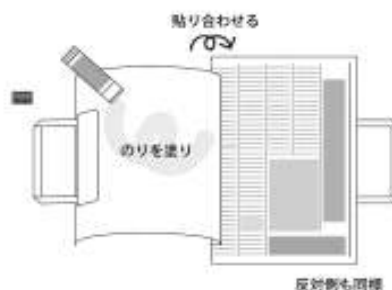
- 3** 紙袋の底と脇を切り取る



- 4** 3で切った紙袋を、2で切った新聞紙の短辺と同じ高さに切る。



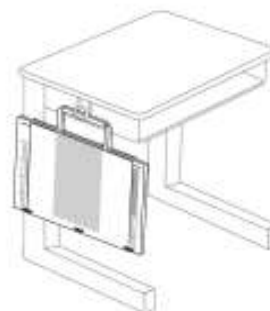
- 5** 2で切った新聞紙すべてと4で切った紙袋を重ね、底の部分を3〜4箇所、ホチキスで留める。



- 6** 紙袋と新聞紙を貼り合わせる。



- 7** 書き終わった半紙を挟む。生乾きでもはさんでよい。



- 8** 1枚書くごとに挟んで机の脇に掛ければ、半紙を机上や床に置かずに済む。